

脳梗塞といっても実は... 5

脳梗塞とは、脳の血管が何らかの原因によって詰まり、その結果脳細胞が死んでしまう病気です。血管の詰まり方には大きく分けて二通りあり、動脈硬化により脳の血管が徐々に狭くなり脳梗塞を生じるタイプ（ラクナ梗塞、アテローム血栓性脳梗塞）と心臓にできた血栓が剥がれて突然脳の血管に詰まるタイプ（心原性脳塞栓症）に分けられます。今回はこれらとは異なり、足の静脈にできた血栓が引き起こす脳梗塞についてお話します。

エコノミークラス症候群という言葉を一度は耳にしたことがあるかもしれません。飛行機などで長時間動かずに座っていると、足の静脈に血栓ができることがあります。足の静脈にできた血栓はそれが剥がれると、通常は肺の血管に詰まり肺塞栓症という病気を引き起こします。これは血栓が下大静脈—右心房—右心室—肺動脈と流れていくからですが、もし心房に小さな穴が開いていると、血栓が右心房から—左心房—左心室—大動脈—脳の動脈と流れて脳梗塞を生じることがあります。このように生じる脳梗塞を奇異性脳塞栓症と呼びます。心房に小さな穴が開いていることは珍しいことでしょうか？じつは胎児では心房に卵円孔という穴が開いていて右心房から左心房へ血流が流れています。生まれたあとこの穴はふさがりますが成人でも 20%程度はふさがらずに残っているといわれます。これを卵円孔開存といいます。このような人は脳梗塞を生じやすいことが明らかになっています。ただし、この穴はほとんどの場合 5mm 以下と小さいもので、咳や息こらえなどをしたときのみ開くので、通常的心臓超音波検査などで発見することは困難です。経食道心臓超音波と呼ばれる検査で、右心房に空気で作ったバブルを注入して、それが左心房に通り抜けるのを目で確認することで、穴が開いていると判定しています（図 1）。

当院では、脳梗塞を発症したものの、なぜ脳梗塞になったかはっきりしない場合、経食道心臓超音波検査を行い、卵円孔開存について調べています。見つかった場合、足の静脈に血栓ができていないか（図 2）、肺梗塞を起こした後がないかについても調べて、再発予防法を考えていきます。いずれにせよ肺塞栓症も脳梗塞も恐ろしい病気です。長時間の立ち仕事、座り仕事で足に血栓を作らないよう、適度に足を動かし、水分をしっかりとるようにしてください。

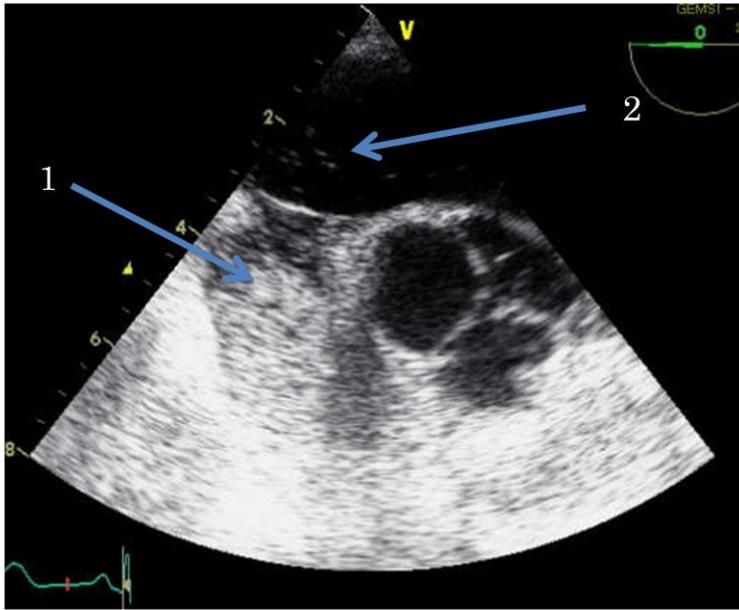


図1 経食道心臓超音波検査によるバブルテスト

- 1: 右心房にエアバブルが充満している.
- 2: 卵円孔を通じエアバブルが左心房に移動している.

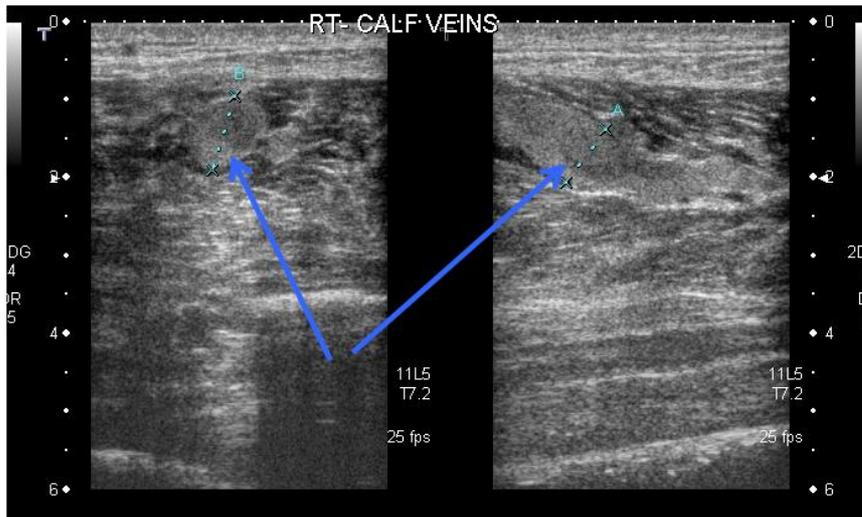


図2. 下肢（ふくらはぎ）のヒラメ静脈に超音波で血栓を認めた（矢印）